ミリカ2017年6月8日(木)掲載

子育てコラム18
parenting column

子育ては楽しいこともあるけど悩みもたくさん。
そんなママのための役にたつアドバイス。

「防ぎたい不慮の事故 」

子どもは、養育者との愛着を土台に、自分の心身を守ることができるようになっていきます。赤ちゃんの頃は親がそばで見守らなければなりません。

1歳から9歳までの死因の上位に「不慮の事故」があり、その中で0歳は、就寝時の窒息、吐物や食物の誤嚥(ごえん)での窒息が多い現状です。1、2歳でも窒息は上位を占めています。誤嚥とは食物などが誤って気管に入ってしまう状態で、誤飲は食物以外のものを誤って口から摂取することをいいます。窒息以外の家庭内事故には、誤飲、転倒、転落、挟む、打撲、やけど、溺水などがあります。取り返しのつかないことが起きないよう、家庭の中を見直しましょう。

直径39ミリより小さいものは誤飲や喉を詰まらせる危険があります。子ども玩具のパーツは、意外と小さいものが含まれていることも多く、何でも口に入れてしまう年齢のうちは誤飲に注意が必要です。兄や姉がまだ幼い時は、愛情から下の子の口へものを入れることもあります。

子どもがずりばいの時期は目線がかなり低いです。ハイハイになればそれから10センチほど上がりますがまだまだ低いです。よちよち歩きの頃でも目線は床から70センチ足らずです。時々は子どもの目線で家の中を見回しましょう。大人の目線では気づかないものが結構見えてきます。赤ちゃんにとっては毎日が新しい発見であり、旺盛な好奇心で家じゅうを探索します。危ないものはないか常に見る習慣をつけましょう。

大事な子どもの命を守るためにも、まずは「安全な環境づくり」「何かの時の対処法を知っておく」、そして「見守り」はとても大切です。

次回は子どもに多い誤飲についてお話しさせていただきます。

めぐみ保育園 園長
弘田 惠子

めぐみ保育園園長。22歳で助産師になり、4年間高知の総合病院産婦人科でさまざまな出産に立ち会う。26歳から大阪府立母子保健総合医療センターのNICUで、6年間未熟児や障害のある赤ちゃんのケアをし、その後堺市で母乳育児相談室を仲間と開設。19年前から高知市内の保育園で、日々子どもたちと楽しく暮らす。助産師、看護師、保育士、幼稚園教諭(二種)。